

報」という新聞みたいな形のファンレターを書いたりしました。それがすごく先生に評判がよくて、そのうち「上京するのでお会いしませんか」と言われて、とうとう一九八五年八月一日にプリンスホテルのロビーでポプラ社の編集者さんも交えてお会いしたのです。そのときに、児童文学で初めてのファンクラブを作りたいということも言われまして、那須先生にも「あれだけファンレター書くくらい暇なんだから、やりなさいよ」と言われて会長になりました。そのときは、高校生になっていました。

牧野 なんだか、恋人同士のやりとりみたい(笑)。

奥山 「会いましょう」というときには、ポプラ社でファンクラブ結成の計画があったんでしょね。

牧野 私は、那須先生と初めて会話を交わしたのは、最初の本を出した九三年頃、児文協の懇親会のあとのカラオケで「あんたはだれかね」と言われて、『悪悪飛童』という本を出しましたと言ったら、「ああ、あの本を書いた人かね」と言ってくださって、こんな新人の本も読んでくださっているのかと。その後、自分が



牧野節子氏

書いた本を送らせていただくようになり、すぐに読んでお返事もくださる。きびしい言葉もありましたが、「りとるめるへん」という掌編集を送ったときに「フランス映画のようだ」というお言葉をいただいて、それがとてもうれしかったりしました。

宮川 那須さんは、職業作家としての自覚が深いから、午前中は一〇枚執筆、午後はファンレターや献本に返事を書く、というふうに決まっていたと思いますね。

「ズッコケ」創世期

奥山 さて、では本題に入っていきます。「ズッコケ」は冊数も多く、長い期間にわたるシリーズですが、『ズッコケ三人

組の大研究」がちょうど「I」「II」「ファイナル」と20巻の区切りで出されていますので、その区切りで語っていきたいと思います。ただ、もちろんこれは、本質的な区切りというわけではないと思いますが……。

宮川 「ズッコケ」シリーズは、はつきりと商品として成立した児童書だと思えます。年二冊、夏休みとクリスマススの頃に出て、子どもたちに喜ばれる。『大研究』の企画の持ち込みをしたのがそろそろ20巻目に近づくところで、その20巻のセットに『大研究』を付録としてつけようという販売戦略だったんです。その流れで40巻目で「II」、さらに「ファイナル」ということになっただけで、『大研究』の区切りはあまり意味ないですよ。

奥山 そうですね。ただ、その区切りで読みながら、逆に本質的な区切りなり変化が見えてくればと思いますので、では、最初の20巻一九七八年から八九年までのところを宮川さんからまとめて解説していただけますか。

宮川 もともとは、学研の雑誌連載の「ズッコケ三銃士」を単行本化して、シリーズにしていこうということで始まりま